

観天 望気

農林水産業の潜在力

この夏、2隻の民間宇宙船が相次ぎ宇宙空間に到達し、民間宇宙旅行の扉が開かれようとしている。東京2020オリンピックではコロナ禍にあってもアスリートのひたむきな姿に感動し、勇気づけられた方は多かったであろう。他方、閉会式翌日の8月9日、国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、産業革命以降の気温上昇幅が2040年までの間に1.5度に達すると公表、人間活動の影響は「疑う余地はない」と断定した。

コロナ禍は世界各国が抱える問題をより顕在化させ、国内でも、「密から疎」「新たな日常への変容」「デジタル化の推進」など、変革の動きが活発化している。加えて、洪水などの異常気象は頻度を増し、カーボンニュートラルへの挑戦は待ったなしである。

北海道経済連合会では、2050年を目標年と定め、望ましい北海道の姿を「ありたい未来」としてイメージし、そこに向かって我々は何をなすべきかを、『2050北海道ビジョン』『課題解決先進地域』のフロントランナーを目指して』と題して取りまとめた。北海道が抱える諸課題を解決するとともに国内外の課題解決にも貢献したいという願いを込めている。

ビジョンの実現に向けて、北海道の農林水産業が担う役割は大きい。食料自給率（カロリーベース）200%の北海道は、食料供給基地としての役割に加え、農福連携やDXと呼応したワーケーションの誘致、世界的にも評価の高い食と観光の連携など、コロナ禍で浮き彫りとなった新たな課題の解決や北海道の稼ぐ力の向上に寄与することが可能だ。カーボンニュートラルへの貢献も期待される。海藻類によるCO₂の固定化、バイオ炭による農地CO₂貯留、クリーン農業・有機農業技術の活用、バイオマスを使った地産地消エネルギーシステム、CO₂吸収源としての森林資源など、ポテンシャルは計り知れない。肝心なのは、どうやってそれを引き出すかである。「宝の持ち腐れ」とならぬようオール北海道での取り組みが求められる。



真弓 明彦
北海道経済連合会 会長

まゆみ あきひこ

1954年北海道旭川市生まれ。79年北海道大学工学部電気工学科卒業、北海道電力株式会社入社。2008年理事工務部長、12年常務取締役、14年取締役副社長を経て、同年9月取締役社長就任。19年6月同社取締役会長に就任するとともに、北海道経済連合会第10代会長に就任。